

川端康成研究

——『山の音』を中心にして——

南 雲 妙 子

序

川端は幼くして父母を失い、姉を失い、祖父母を失つて孤児として生長した。『葬式の名人』『孤児の感情』『父母への手紙』といった数少ない川端の自伝的な作品の中で彼が自ら語っているように、孤児としての川端の特異な生いたちは、後の川端の作家としてのあり方に大きな影響を与えずにはおかなかつたと思われる。『十四歳の日記』にまざまざと感じられる真実を見通そうとする十四歳の少年の鋭い目は、唯一人の肉親である祖父の死に近い姿を現前にして自らの孤児の運命を悟つた。そしてその時川端は、孤独というものの恐ろしさを既に身をもつて感じていたのではなかつたろうか。が、人生の醜さと寂しさと厳しさを真正面から見つめ、それらが凝結したような老人の一挙一動を一言も洩らすまいと具に写し取ろうとする十四歳の少年は、一体何に動か

されてそのような一見奇怪な行動を敢えてしたのだろうか。それは老人の醜い姿、そして自らの苦悩を確認し、強めるだけではなかつたのであろうか。しかし『十四歳の日記』を写し取らねばいられなかつた少年の心には、それを奇怪とも感じない必死の祈りがあつたのである。「ああこの百枚の原稿を書き終る時、書き終るまでに祖父の身は、不幸な祖父の身はどうなっているだろうか。」日記が百枚になれば祖父は助かる、なんだかそんな気がする、という川端の言葉がそれを語っている。祖父に対する切ない愛情、死に対する底知れない恐怖感と不安が川端をして原稿用紙に向かわせたとするなら、この時既に川端は、自らの孤独を乗り越える唯一の道が文学に結びついているという事を無意識の中にも悟つていたのであろう。その文学に通ずる真実を追求しようとする心、その為に現実を直視しようとする態度が『十四歳の日

『記』の冷徹なりアリスティックな描写に既に感じられるのである。そして冷酷な現実の諸相の中に、真実を、美をつかみとる鋭い目、繊細な感受性は、このように自らの孤独を深く見つめる事によって養われていったと考えられる。「谷川の清水の音」というような表現に於いて明確に示された川端の天稟の美意識は、孤独、虚無といった宿命の深淵をさ迷ううちにますますと澄まされていったのであろう。

川端文学の根底を流れる虚無や美意識の成立ちは、以上のようにその特異な追ひ立ちと深い関わりをもっているのであるが、更に川端文学の成熟、完成への発展を考える時見過す事の出来ないのは、大正十三年に創刊された「文芸時代」に始まる新感覚派運動であつた。当時の新進作家の一人として「文芸時代」から出発した川端は、「即物的な、感覚的な対象の把握」をモットーとする新感覚派運動の中心人物の一人として、親友の横光利一と共に次々と新しい試みを展開して行つた。川端の才能の万華鏡とも言うべき数々の掌篇小説は、横光の作品とは自らその性格を異にしていたにしても、人生の一面面を抽象化し、形式化し、装飾化しようとする方法意識に於いて正しく新感覚派文学を代表するものであつた。そして川端の場合は、横光のさまざまな試みが単なる観念の構築物に過ぎなかつたのとは違って、川端自身の感覚や虚

無感に基づいて作り出されたものであつたという点で、単に「新しい衣裳の空しい遊戯」ではなく、その天稟が作家としての表現を得る為の、言わば文体模作時代としての意義をもっていたのである。『十四歳の日記』に示された天稟が、『雪国』という芸術的表現を得て開花する為の必然的な形成であり、段階であつたのだ。

『雪国』に於いて展開されているのは正しく美の世界である。雪国という別乾坤で、駒子という理想の女性像を得た川端の筆は、澄み切つた、純粹の美の世界を、非現実の現実と感じさせつつ、見事に描きあげていつた。雪国の世界がこの世にあり得ない事はわかつていても、むしろだからこそそれを文学の世界で結実させ、現実化させようとする川端の願いが、我々を非現実の世界に誘い込み、陶醉させるのであろうか。決して現実にはあり得ない『雪国』こそが真の世界、真の現実であると感ずる島村の感覚にまで読者を引きずりこんでしまふ、そのような所に川端文学の魅力が存在するのであろうか。何れにせよ飽くまで美を追求しようとする川端文学のあり方は、非常に特異な、個性的な存在と思われる。ではその芸術性のあり方、「孤高の文学」と言われる川端の個性的な文学は具体的に如何なる構成を持つのであろうか。虚無の深淵の中から生命の輝きを求めて、川端の美意識は如何なる様式

を展開してゆくのだろうか。このような問題意識の下に、本論に於いては川端の代表作と考えられる『山の音』を中心に考察を進めてゆきたいと思う。

一 『山の音』について

『山の音』は、昭和二十四年九月、「改造文芸」に発表された「山の音」に始まり、以後「群像」「新潮」等の諸雑誌に発表され、昭和二十八年まで書き続けられた。その間昭和二十七年二月に、『千羽鶴』と『山の音』とを合せて筑摩書房より刊行し、これによつて昭和二十六年度の芸術院賞を、又昭和二十九年には、『山の音』によつて野間文芸賞を授賞した。この事は『山の音』が単に川端文学に於ける傑作であるばかりでなく、戦後の日本文学の最高峰に位するものである事を物語っている。

ところでこのように、『山の音』は長年かかつて少しづつ、いろいろな雑誌に分載発表されたのであるが、このような発表の仕方とは『雪国』や『千羽鶴』といった川端の他の長篇小説にも共通するものであり、更に、一回一回発表された個々の短篇が皆それぞれに独立性をもっている事も共通する性格であると言えよう。即ち、川端の長篇小説は幾つかの短篇小説をそのままつなぎ合わせたようなものである為、部分部分がどこで切れても構わないよ

うな個々の独立性をもちながら、しかも全体としての統一を保っている。それは連句的、絵巻物的という点で伝統的な構成方法と、言うべきかも知れない。又、筋らしい筋のないこの小説の中では、荒筋よりもむしろそれぞれの章の題名にも表現されている一年余りの四季の推移と、その季節感による統一、及びそれらの詩的イメージの美しさの方がよほど注意をひかれる。即ち、その発想の仕方をみても伝統的な一面が窺われるのである。が、川端文学をとりまく一見美しいイメージは必ずしもそこに含まれている内容を語つてはいない。何故なら川端文学の底には、死、虚無、人間の無意識の本能といった不気味な深淵が漂っているからである。「山の音」とは第一章の題名であると同時に、そのまま全篇を通じての題名でもあるのだが、それは一体何を意味し、何を象徴しているのだろうか。

二 主人公のあり方

『山の音』は凡て主人公信吾の心理を通して描かれているという点で一種の心境小説である。従つて主人公のあり方を探ると言つても所詮はその心理の動き、あり方を中心に見る事になり、テーマも無論そこから導き出される事になる。では信吾の人間像及びその心境とは如何なるものであろうか。心理の動きを追つて読

んでいく事にしよう。

まず初めに気がつくのは、「山の音」第一節の信吾の物忘れに始まり、第二節の山の音を聞く件りではつきりそれと知らされる、信吾の死に通ずる老いの恐怖感、疲労感と言つたものであろう。それは作品全体の主調低音として始終ひびいてくるのである。

尾形信吾は少し眉を寄せ、少し口をあけて、なにか考へてゐる風だつた。他人には、考へてゐると見えないかもしれぬ。悲しんでゐるやうに見える。(中略)

加代といふ女中は半年ばかりいて、この玄関の見送り一つで、やつと記憶にとまるのかと考へると、信吾は失はれてゆく人生を感じるかのやうであつた。

(「山の音」)

この日常茶飯事的な、如何ともし難い記憶の衰えには、信吾自身老人らしい諦めを感じてはいるが、それを誰よりも鋭く感じているのも信吾自身に外ならない。「失はれてゆく人生」、それは死に刻一刻と近づいてゆく人生であり、信吾にとつて記憶の衰えを意識する事は、老いを通してその彼岸にある絶対の死を意識する事に外ならない。無論生を希求する者にとつて、死は常に不安と恐怖との対象である。従つてあちこちの場面に見られる信吾の日常茶飯事的物忘れは、彼の死に対する恐怖感の反覆でもあるのだ。しかし、信吾の心に暗い陰を与えているのは必ずしも死を意

識した肉体的、生理的な老いの自覚だけではなく、より普遍的な人間の宿命とも言うべき感情が、静かに、だが根強く流れている事にも注意しなければなるまい。

冒頭の、山の音を聴く件りで蟬の描写によつて示された夜の深さは人間の孤独感を象徴し、更に山の音の描写は、それを死の恐怖感にまで発展させる。それは肉体の滅亡というより、絶対の孤独としての底知れない恐ろしさをひびかせているのだ。そして、「さびしさ」「暗い孤独」というような表現で度々繰り返される信吾の老いの感情が真実の声として感じられるのは、それが正しく作者自身の感情に外ならないからであろう。『山の音』の中ではその「さびしさ」と「鬱陶しい家庭」を裏付けるものとして、次のような信吾の結婚の事情が用意されている。

信吾は少年のころ、保子の姉に憧れた。姉が死んでから、保子は姉の婚家に行つて働き、遺児を見た。献身的につとめた。保子は姉のあとに直りたかつたのだ。美男の義兄が好きでもあつたが、保子もやはり姉に憧れていたのだ。同じ腹と信じられぬほど姉は美人だつた。保子には姉夫婦が理想の国の人と思はれた。

保子は姉の夫にも遺児にも調法だつたが、義兄は保子の本心を見ぬ振りした。さかんに遊んだ。保子は犠牲的な奉仕に甘ん

じて生きるつもりらしかった。

信吾はそのやうな事情を知つて、保子と結婚した。(「山の音」)
ここに示される信吾の、保子の姉に対する失恋とか、姉に比べて美人でないばかりか、極めて無神経な妻保子に抱く失望感とか、美人の妻を持ちながら平気で浮気をする、信吾にとつては全く理解出来ない存在になつてしまつた息子の修一とか、顔が醜い上に性格的にもひねくれたところのある出戻り娘の房子といった人々に示される如何にも重苦しい家族構成は、「鬱陶しい家庭」として重要な背景を為しているには相違ない。しかしこのような家族構成のあり方を一つ一つ取り上げてみると、以上のような人物設定は必ずしも十分な客観的必然性を得ているとは言えない事が明らかになる。何故なら、そこに描かれているのは主人公の感覚に映つた面だけで、内面の世界は完全に無視されているからである。では何故信吾は、戦後の世相、特にそれが如実に反映された、彼の言謂「鬱陶しい家庭」に反する日本の心情、日本的な美というものに沈潜する事によつて、自ら孤独の中へ入つてゆかねばならなかつたのであろうか。それは、「鬱陶しい家庭」そのものよりも信吾自身の内的なもの、即ちそれを鬱陶しいと感じざるをえない信吾の心のあり方、その感覚、意識、或は意識以前のもののあり方に、より多くの問題性があると思われるのである。そして、それ

を規定するものこそ、信吾の虚無と美意識であると考えて良いのではなからうか。何故なら、彼の孤独感と密接なつながりを持つと思われる人生観、結婚観、及び人間観と言つたやうなものを辿ると、どうしてもそこに、老いの諦めと定義づけただけでは言い尽くせないもの、即ちより深い虚無的なものを感じざるを得ないし、一方信吾の、妻の保子や娘の房子、及び嫁の菊子や保子の姉と言つた、彼の家族、或は思い出の人に対する気持が、如何に強く信吾独自の美意識に左右されているかに気付かざるを得ないからである。そして、それらは孰れも川端自身の本質的な一面の表われに外ならないと思うのである。

「人生の部分品」「しかし、つまらない一生だ。」「幸福といふものは、このやうにつかの間で、はかないものかもしれないと思つた。」「こんなのが人生かと、信吾はつぶやいてみるほかはなかつた。」という言葉には、人生に対する虚無的な感慨が込められているのではなからうか。そしてこのような信吾の人生観は、更に彼の結婚観、夫婦観にまで発展してゆくのである。「さういつまでも、親が子供の夫婦生活に、責任が持てるものかね。」「今の世で、子供の結婚生活に、親がどれほど責任が持てるんだ。」「女の結婚の失敗には、解決がないのだらうか。」と言うように度々繰り返される、解決のない娘の結婚の失敗、それに対してどうし

てやる力もない親の立場といった認識には、単なる無力感だけでなく、実は結婚そのものに対する不信の念が強く働いている事を感ずるのである。そして、一面に於いて「まだ結婚してゐないため清潔のやうにも思へた。」「未婚の娘が入れてくれたら、もつといいだらうか……」というような処女讚美の形で表わされた結婚不信感は、もつと突きつめると、人間と人間との結びつきに対する、更には、人間そのものに対する不信の念といったものにぶつからざるを得ない。つまり、人格としての人間を信じてはいないのである。「おたがいの悪行を果しなく吸いこんでしまう」「夫婦の沼」「個性も遺言も失つてしま」つた「老いたる妻」といった夫婦観の前提となつているものも、同じような人間認識に基いているのではなからうか。菊子の妊娠に思いを廻らした時、「これも人間かといふ思ひ」を持たざるを得なかつた信吾の言う人間が、人格的なものではなく、本能的、動物的な生命としての人間である事を考えてみても、それは明らかであろう。そして、生命としての人間の醜惡な面を強く意識せずにはいられぬ主人公のあり方は、人間でしかない作者自身の孤独と深く結びついているように思われるのである。

しかしこのような信吾の虚無感は、自分自身の殻の中に閉じ込めようとする方向へは向かわず、むしろ人生の中に、或は人間の

中に信じる事の出来る唯一の眞実、即ち美のみを求めようとする厳しい美の感受者としてのあり方へと結びついていった。この意味に於いて信吾の虚無は、眞実に近づこうとする者にしばしば見られる冷酷さの一面であつたとも言えよう。しかし、その美意識が決して人格的、精神的なものに基く倫理的な美ではなくして、飽くまで生命的、肉体的なものに基く感覺的な美であつてみれば、「非情の美」とか、「非人間的な冷たさ」といった批評の生まれてくるのも蓋し当然であろう。

三 対比的人物像のあり方

では主人公のあり方を規定する美意識とは、具体的には如何なる形で表現されているのだろうか。私は、その顕著な表われの一つが、人物描写に見られる対比性、即ち対比的人物像のあり方であると考へてみた。戦後の世相に反撥し、堪えてゆこうとする孤独な信吾は、やはり同じように孤独に堪えている菊子を哀れみ、互いに心を通わせ合う事によつて、日本人の生き方のあはれといった昇華された美しさを描き出している。だがここに描き出されている美とか抒情は、やはり対比性という所から生じたものと考えられるのである。老人の信吾によつて象徴される老いと、菊子によつて象徴される若さとの対比が、「日本古来の悲しみ」と言う

日本独自の美意識を支えているのである。

不気味な山の音を聴いて、ある日突然に「死を告知されたやうな」恐怖感を覚えて以来、信吾にとつて死は急に身近な存在となり、淡々とした静かな諦めの中に不安や恐怖感が交錯する老い的心境が信吾の心を支配するようになった。思うままにならない鬱陶しい家庭とは、信吾の老い的心境の反映に外ならず、そんな暗い孤独の日々に「唯一の明るい窓」としてわずかな慰さめを与えてくれるのが、若々しい息吹を吹きかける嫁の菊子の存在であつた。台風之夜、巴里祭のリス・ゴウチイのレコードを聞き、しかも「いくらか嵐にのりうつられたやうにはしゃいでゐた」菊子の、如何にも初々しく潑刺とした若さに「あまい心を誘はれ」る信吾、「化粧してゐなくて、少し青ざめた顔を赤らめ、眠いやうな目ではにかみ、紅のない素直な唇から、きれいな歯を見せて、氣まぐれにほほ笑む」菊子を愛らしいと思う信吾の氣持は、時には若しい慾望にゆらめく。「夢で菊子を愛したつていいではないか。夢にまで、なにをおそれ、なにをはばかりのだらう。」と、若々しい生命に憧れる信吾の氣持は秘かに不倫の線を越えようとする。しかし、「老いが恋忘れんとすればしづれかな。」という蕉村の句に託された自己の心情は、何よりも老いの感情を克服する程の若さがもう自分にはない事を自覺させる。このように、老いと若

々しい慾望との交錯する信吾の複雑な心情は、その孤独感に裏打ちされて更に「日本古来の悲しみ」といつた諦念にまで沈んでゆくのである。一方、「造化の妙、生命の波に素直に従つてゐる」かのような菊子も、運命への抵抗を内に秘めながらもそれを実現し得ない人間の悲しさにじつと堪え、わずかに、「別居させられるのは、恐ろしい氣がしますわ。一人でとてもじつとうちに待つてゐられませんわ。さびしくて、かなしくて、こはくて。」と、その悩みを信吾に訴えるだけなのであつた。ここに於いても二人の間に交わされるデリケートな心の交流は、老いと若さとの鮮やかな対比を示しつつ東洋的諦念の中に美しく溶け込んでいつてゐる事がわかる。

「埋木なれども、心の花のまだあれば……。」

そんな言葉も謡にあつたやうだ。

艶めかしい少年の面をつけた顔を、菊子がいろいろな動かし方を、信吾は見てゐられなかつた。

菊子は顔が小さいので、あごのさきもほとんど面にかくれてゐたが、その見えるか見えないかのあごから咽へ、涙が流れて伝はつた。涙は二筋になり、三筋になり、流れつづけた。

「菊子。」と信吾は呼んだ。

「菊子は修一に別れたら、お茶の師匠にでもならうかなんて、

今日、友だちに会つて考へたんだらう？」

慈童の菊子はうなづいた。

「別れても、お父さまのところにて、お茶でもしてゆきたいと思ひますわ。」と面の蔭ではつきりと言つた。〔春の鐘〕

慈童面をかぶつた菊子、これこそ信吾にとつて、永遠の少年の象徴と菊子という女性とが一つになつた瞬間であり、永遠の若さと女の生命とを象徴する美の理想像なのではなからうか。そして無論それを美しいと感ずる信吾の心境は、「埋木なれども、心の花のまだあれば……。」に象徴される老境に外ならない。若さの美は老いの目を通して一層輝くと言う対比性の持つ当り前の効果、不思議な程見事に生かされている事実をこの場面に見出すのである。

さて、信吾の死の恐怖に彩られた老いに対して、生命の象徴のように若く潑刺と描かれていた菊子は、川端の理想とする女性像という点でも、肉体的・感覚的な面で、又性格的な面でも女性の醜を象徴しているかのような娘の房子と対比される事によつて、ますますその美しさを強調される事となる。そして、ここに示された美醜に対する鋭い目がそのまま信吾の、女性に対する愛情のバロメーターになっている事は注意する必要がある。

「国子を背負ひ、里子の手を引き、風呂敷包をさげて、電車の

駅から歩いて来た」房子の姿を「やれやれと思」う信吾の頭の中には、対照的な存在として「身だしなみよくしてゐる」菊子のイメージがある。そこには図らずも親子の愛情より美意識による好悪感の方が強く働いているのだ。菊子は、「揉上げと額とのあひだの生え際」の「微妙に可憐な線」、「あごから首」の「言ひやうなく洗練された美しさ」、「ほつそりと色白の幼な顔」「素直な唇」「きれいな歯」「美しい肩」「やはらかい匂ひ」「きれいな眉」「声のきれいなさ」等々、視覚、聴覚、嗅覚に到るまで如何にも川端好みの、繊細で清潔な女性として描かれている。が一方房子に關しては、「寝間着のまま、下の子の国子に乳をふくませて、茶の間へ出て来」たり、子供を寝かしつけながら自分も一緒に昼寝してしまふといっただらしないさや、元旦の朝でさえ皆の迷惑を一向構わずに悠々と遅くまで寝ているというような生活態度が強調されている。特に、修一の浮気、相原の心中という、共に夫の裏切り行為に対する反応の仕方は、その対照的な表われと言えよう。

菊子は修一の足を自分の膝に乗せて、靴を抜がせてやつてゐるらしい。

菊子はゆるしてゐる。信吾が案じるまでもなく、夫婦のあひだでは、菊子もこんな風にゆるせる時を、むしろよろこんでゐる

るのかもしれない。

（「夜の靴」）

襖を手荒くあけて、房子が寝間着のまま出て来た。

新聞をよくも読まないで、びりびり引きさいて投げつけた。

やぶくにも力があまつたが、投げても飛ばなかつた。房子は横に倒れるやうにして、散らばつた新聞をはねのけた。

（「雨の中」）

ここに於いて、以上のような菊子と房子の美醜の対比が、彼等に対する信吾の気持の反映に外ならず、二人の対比的な人物像は、信吾の愛情を間に挟んで鮮やかに描き出されている事を感じるのである。作者が如何に繊細に優しく美を捉え、冷酷に厳しく醜を捉えている事か、そして菊子の美が房子と対比される事によつて、如何に効果的に印象づけられている事か。しかし、房子の醜さは単に菊子の美しさを引き立たせる為ばかりではなく、それも又女性的一面であるという、否これこそ現実の女性なのだという現実の厳しい認識があつたればこそ、菊子のような理想的女性像を文学の世界に於いて実現したかつたのではなからうか。

さて、以上のように菊子と房子に見られた美醜の対比性は、保子の姉と保子との関係にも見出される事は明らかであるが、そのような対比性はさりげない瞬間的な場面に於いても、人間を問わず、自然を問わず、しばしば見出されるのである。

里子はひきつけたやうに、白目をつり上げてゐた。おそろしい顔だつた（中略）

振袖の子は泣きやむと、濃い白粉はむらだが、目が洗つたやうにかがやいた。

（「春の鐘」）

に見られる美醜の対比、又、

……青年はくすんだ臍脂のシャツを着て、上のボタンの一つはづれたところに、胸の骨が見えてゐた。

信吾はこの青年が遠からず死ぬやうな気がした。目をそらせた。

臭い小溝のふちに、よもぎの列が青々と生いしげつていた。

（「蛇の卵」）

と言う、「巨大な怪獣」のような外人に従う男娼らしい青年の、如何にも病的な様子と、生命力の逞しさと新鮮さを感じさせるよもぎとの間に見られるやうな微妙な対比性は、筋らしい筋のないこの小説の中で、人物像を浮き上がらせる為に効果的な役割を果たしている事がわかる。

生と死、虚無と純真さ、美と醜、抒情と冷酷さとが入り乱れ、交錯する『山の音』、優しく繊細な神経と冷徹なエゴイズム、死への親しみと抵抗という矛盾の中に生きる主人公信吾、……「苦しい息も絶えそうな声と共に、しびんの底には谷川の清水の音」の

一句に既に示されたように、『十四歳の日記』から『山の音』に到るまで一貫して見られる対比性は、それが単なる構成上の技巧ではなく、川端の本質的な二元性に基いている事を語っているのではなからうか。もはやそれは運命的なものと考えられるのである。

幼なげな美しさと母性的な優しさとを兼ね備えた菊子、その菊子の存在を支える美の感受者、傍観者としての信吾、そこには少女の純粋な生命の美の果敢なさを悲しむ目と、女の本能、母性そのものを純粋に描き出そうとする目が重なり合つて存在しているのである。例えば『伊豆の踊子』の踊子、『夜のさいころ』のみち子、『虹』の銀子、『夕映少女』の少女、『童謡』の半玉等に対する作者の目は前者のそれであり、『温泉宿』の野性的な女人像、『禽獣』の千花子、『夕映少女』のお米、『雪国』の駒子、『千羽鶴』の太田夫人、『みづうみ』の久子等々、それらは時には野性的な女として、時には母性そのものとして、又時には魔界の女性のような幻想性を帯びて表現されたりはするが、そこに一貫している作者の目は明らかに後者のそれに違いないのである。そしてこのような二元的な女性像が『山の音』に到つて「不思議な融合のしかたで有機的な一体となつている」のが菊子であると言えよう。又菊子の、悲劇的な運命にじつと堪えている孤独の姿

と、日常生活の中に生きている女としての姿は、今までの川端文学に見られなかつた新しい性格として注意される。それは、戦後の『山の音』に到つて川端が始めて家という、生活に密接に結びついた環境を背景として取り入れている事に由来するのは言う迄もない。この事は又、今までの川端の作品が如何に生活とかけ離れたものであつたかを改めて感じさせると共に、『山の音』の老熟性をも暗示していると考えられる。島村や駒子に比べると、信吾や菊子はずつと現実化され、穏和化されている。非現実の現実の域を脱し、現実の現実即ち日常生活の中に作品の場を求めようとする方向に変わつて来たとも言えよう。が、小説のよつてたつそのリアリティーは日常生活そのものではなく、その中に生きる信吾の生命感であり、微妙に交錯する心理の動きである事は注意すべきであろう。従つて、この作品のテーマが主人公の心理の動きそのものにある事は言う迄もないが、その中でも中心的な動きを示しているのは、菊子に対する愛情とも、憧れとも、思いやりとも言える微妙な心理である。そして、そのような信吾と菊子との心の通い合いを中心に、信吾の死に対する恐怖感、老いの諦めといった感情がそれと重層的な表現で書かれ、その上を更にみちの盆栽に象徴された美しい保子の姉のイメージが鮮やかな色彩感を添えていると言えよう。この三つのモチーフが互いに必然的

な関連性をもつて結びつきながらも、その微妙な交錯のうちに見事な対比性を得ている為に、それぞれの印象が鮮明に浮き出ているのである。

若さは果敢ないが故に美しく、美は醜の中にあつて更に輝きを増し、生は死に縁取られているが故に尊いという、最も単純で、最も当り前の真実が、最も具体的に表現されているのが川端文学なのではなからうか。

四 連想によるテーマの反覆

川端文学に見られる構成上の大きな特色の一つとして、長編小説の発表形式、及び個々の短篇と全体との関係といったところから、連想による物語の進行という事が考えられる。つまり、筋の発展、展開というよりも、季節の推移や連想による場面の移り代わりによつて進行してゆくのである。「……を思い出した。」とか、「ふと思ひ出した。」とかいつた具合に極く何気なく挿入されている連想場面が実は主人公の心理の暗示であつて、側面からテーマやモチーフを浮かび上がらせる重要な役割を果たしているのである。そしてこのような形でなされるテーマの反覆、強調という事が、川端文学の芸術性、美の様式といったものを特色づけているとも言えよう。

『山の音』のモチーフとして始終ひびいてくるのは、不気味な山の音に象徴された死の告知であつた。

信吾は雨戸をしめながら、妙なことを思ひ出した。

十日ほど前、新築の待合で客を待つてゐた。客は来ないし、芸者も一人だけ来てゐて、あとの一人か二人かはおくれた。

(中略)

二月あまり前に、芸者はこの待合を建てた大工と、心中しかつたのださうである。しかし青酸加里を呑む時になつて、この分量で確かに工合よく死ぬるのかといふ疑ひが、芸者をとらへた。(中略)

私がだれかに薬の分量を計つてもらつてから、やり直しませうと、芸者は言い張つた。

「ここにそのまま持つてますわよ。」

怪しい話だと信吾は思つた。この待合を建てた大工といふのだけが、耳に残つた。

芸者は紙入から薬の包みを出して、開いて見せた。

「ふうん。」と言つて眺めただけだつた。それが青酸加里かなにかも、信吾にはわからなかつた。

雨戸をしめながら、その芸者を思ひ出したのだ。(『山の音』「死を告知された」のような恐怖感が、心中しかかつたという芸

者の話を突然思い出させる。そして青酸加里を懐に入れている芸者の姿は、死の影を背負つて生きている生の不気味さを感じさせながらも、一方ではいつでも死の時を選べるという死の自由への連想へとつながつてゆく。

今も夢うつつの、薄ぼんやりした頭に、アカシヤの並木が浮んでゐた。その並木のアカシヤはみな花をつけてゐた。(中略)アカシヤの並木に花が咲いてゐるといふだけで、信吾の印象に残つたのだらう。肝臓癌の友人を病院に見舞つた帰りみちだつたからだ。(中略)

「使やしないよ。僕は使やしない。あの時の話のように、ただ自由を持つてゐただけだ。これさえあればいつでもと思ふと、これからの苦しみに堪へる力になりさうなんだ。さうだらう。僕の最後の自由といふか、唯一の反抗といふかは、それしかないぢやないか。しかし、僕は使はないと約束するよ。」

(「蛇の卵」)

「ただ自由を持つてゐただけだ。」といつて青酸加里をほしがる友人の姿……信吾の、友人に関するエピソードは凡て死に結びついて来る。細君に虐待されて死んだ者、温泉宿へ若い女を連れていつてそこで突然死んだ者等、何処か尋常でないものを含んだこれらのエピソードは、言うまでもなく信吾の心境の反映に外

ならないのである。

友人が帰つた後で、信吾はひとり今の話を思ひ出してゐると妙な心理が働いた。死んだのが事実だとすると、その前に北本の白毛が黒い毛に生え変つたのも事実のやうに思へて来る。黒い毛の生えたのが事実だとすると、その前に北本の気が狂つたのも事実のやうに思へて来る。狂つたのが事実だとすると、その前に北本の頭の毛をすつかり抜いたのも事実のやうに思へて来る。毛をすつかり抜いたのが事実だとすると、北本が鏡を見てゐる間に、頭の毛が白くなつていつたのも事実のやうに思へて来る。してみると、友人の話はすべて事実ではないか。信吾はぎよつとした。

(「朝の水」)

一見、落語とか尾鰭のついた噂話としか思えないような友人北本の話が、信吾の心理の動きを通して、思わずギョツとするような、死と闘つてゐる人間の現実の姿として捉えられてゆく。そしてこのあたりから信吾の死に対する恐怖感は、人間凡ての運命という諦観へと高められ、ついには自らを落鮎の姿に喩えようとする静かな老境に託されて幕を閉じる事になるのである。

「今は身を水にまかすや秋の鮎、とか死ぬことと知らで下るや瀬々の鮎、とかいふ昔の句があつてね。どうやら、わたしのことらしい。」

(「秋の魚」)

これも又、「鮎が三匹しか魚屋になかったんです。」という夕食の鮎からの連想であるが、ここに到つて、不気味な連想を伴つて起伏していた信吾の死の恐怖感が、東洋的諦念にまで高められ、深められているのを感じるのである。そして構成の上でも、三匹しかなかった鮎によつて複雑な家族構成を浮き上がらせ、更に信吾の鮎の話に保子の自己嫌悪や房子のひがみ根生を騒々しく絡ませる事によつて、むしろそれらと対照的に静かな、しかも深い信吾の老境を印象づけてゆくといつた、神経の行き届いた緻密さを感じさせられるのである。

次に、この作品のテーマとも言ふべき信吾の菊子に対する心理の動きを追つてみると、これも又同じような展開の仕方をしていく事に気付くであろう。菊子が如何に理想化され、美化されて描かれていたかという事は、既に房子と対比された菊子像によつて明らかであるが、更に一層菊子を美化する手段として、菊子の悲劇的な要素、即ち夫の修一の不貞という事が大きな役割を果たしている事にも注意しなければなるまい。美しい女性にとつて、悲劇的な環境がその美しさをますます高め、純粋な生命の悲しきにまで昇華する役割を果たす場合が往々にしてあり得る。況して、『山の音』は川端が初めて家という日常生活を背景として取り上げているという点で、『伊豆の踊子』『温泉宿』『浅草紅団』

『虹』『童謡』『花のワルツ』『雪国』等に代表される今までの作品が、踊子、温泉宿の女中、或は芸者といった特異な環境が用意されていたのとは事情を異にしている。このようなところから『山の音』の菊子には、浮気で、無神経で、しかも女性の近付き易いタイプの男性を夫に配するという手段がとられたのではなからうか。そして、修一の浮気によつて与えられた菊子の悲劇性が具體的な形をとつて表現されたのが、妊娠中絶という事件であつたと考えられるのである。この事件も、所々に何気なく挿入された連想場面によつて暗示され、反覆されて印象を深めてゆくのだ。

子犬が宗達の絵になつたのも、慈童の面が現の女になつたのも、あるいはこの二つのことの二つの逆も、ふとした時の啓示なのかと、信吾は思つた。(中略)

「さうさう、おもしろいことを言つた奥さんがありました。こんどテルがお宅へ来て産んだから、お宅でも産まれますよ。テルが奥さんに催足したんですよ。おめでたいぢやありませんか。」と保子が言ふと、菊子は赤くなつて、保子の肩の手をひつこめた。(中略)

信吾は菊子の後姿を見なかつた。黒い小犬を目で追つてゐると、窓際に大きいあざみの倒れてゐるのに気づいた。花は失せ、茎の根元から折れながら、あざみはまだ青々としてゐた。

「あざみは強いもんだね。」と信吾は言った。（「島の夢」）

「あるひはこの二つのことの二つの逆も、ふとした時の啓示なのかと……」という抽象的な言葉に見られる妊娠の神秘的な予告は、「テルが奥さんに催足したんですよ。」と言う言葉によって表面化し、更に、倒れながらも青々としているあざみの描写には、修一の為に傷つきながらも「腰まはりなども豊かになつて来た」菊子の、女としての逞ましい生命力が鮮やかに象徴されているのではないだろうか。

さて、以上のような妊娠の予告は極く自然に中絶の方向を辿る事になり、菊子の悲劇性が具体化してくる前提が形づくられる。

修一の夢で起きる前にも、信吾は夢で目がさめたのだった。

（中略）

おぼえてゐるのは、十四五の少女が墮胎をしたといふことと、「さうして、なになに子は永遠の聖少女となつたのである。」といふ言葉だけだった。（中略）

夢のことは、昨夜の夕刊の記事に過ぎなかつた。（中略）

この新聞記事に、信吾はショックを受けた。そして眠つたので、少女の墮胎を夢に見た。（中略）

信吾のショックは、夢で美しくなつた。なぜだろうか。

信吾は夢で、墮胎の少女を救ひ、また自分をも救つたのかも

しれない。

（「夜の声」）

夕刊の記事という極く日常的、一般的な形で初めて表現された墮胎という言葉は、信吾の夢の中で聖少女として美化され、「化粧してゐなくて、少し青ざめた顔を赤らめ、眠いやうな目ではにかみ、紅のない素直な唇から、きれいな歯を見せて、気まり悪げにはほ笑む」現実の菊子へと当り前のように結びついてゆく。そしてそのような信吾の心理の流れに一層現実性を持たせる為の役割を果たしているのが、中絶した友からの菊子宛の手紙という事になるうか。

夕刊の記事と今朝の手紙と、信吾はその符号を思つた。墮胎の夢まで見てゐる。

信吾は昨夜の夢を菊子に話したい、誘惑を感じた。

しかし、言ひ出せないで菊子を見てゐると、なにか自分のうちに若さがゆらめいたが、ふと、菊子も妊娠してゐて、中絶しようとしてゐるのではないかと、連想がひらめいて、信吾はおどろいた。（「夜の声」）

意識下の世界で次第に形づくられてきたものが、意識の世界にのぼつてくる瞬間とも言えよう。しかしこの唐突な連想も、テルの出産、慈童の面、宗達の絵、新聞記事、夢、手紙というように何気ない小さな事件を積み重ね、反覆し、強調する事によつて、

信吾の無意識の世界で次第に形づくられていたものであることがわかる。従つて連想のひらめきとはいつても、それは深層心理学的な手法を極く目立たない形で駆使した緻密な構成の上に成り立っている事は明らかであろう。そして、そこには更に、作者の鋭く潔癖な美的感受性を伴つた厳しい選択意識が加わっているのである。菊子の妊娠及び墮胎の事件は、大体に於いて以上のような心理的経過を辿つているのであるが、それを見ると、事件の起る必然性の描出が必ずしも人物の性格や環境といった客観的な要因によるのではなく、ふとした暗示や啓示、そしてそれを感じる主人公の心理の動きによつてい事がわかり、このモチーフに於いても、連想形式が重要な役割を果たしている事を改めて痛感するのである。

さて、このような構成のあり方は、『山の音』のもう一つのモチーフとも言うべき、保子の姉の思い出の展開の仕方にも見られる事に気付く。

はつそりと色白の菊子から、信吾は保子の姉を思ひ出したりした。

信吾は少年のころ、保子の姉にあこがれた。(中略)

息子の嫁に菊子が来て、信吾の思ひ出に稲妻のやうな明りがさすのも、さう病的なことではなかった。(「山の音」)

ここで始めて保子の姉が説明され、その姉への恋心が嫁の菊子により復活した事が暗示されるのであるが、それは、これ以後その抽象的な印象を避ける為に、姉の形見の風呂敷、その風呂敷につながる大きなもみぢの盆栽といった具体的、しかも色彩鮮やかな感覚的なものによつて象徴され、反覆されてゆくのである。このようにしてさりげなく用意され、強調されている亡き人への恋心は、信吾の、妻や嫁に対する多少常識はずれな気持のあり方を読者に納得させ、無理なく感じさせる為の手段であるかもしれない。しかし、山の音と落鮎によつて巧みに照応し、象徴された信吾の死に対する恐怖感が、不気味な音をひびかせて心の底を流れてゆくその上を、もみぢを媒介として照応し合う菊子と保子のイメージが、まるで現実と夢の世界を結ぶ虹のかけ橋のようにはかるのである。

結 語

さて、本論の分析から、川端文学の構成上、及び内容上に表われた特色とは一体何であろうか。それは結局、川端文学の本質的な二元性という事になるのではないだろうか。

虚無的な人生観、人間観を内包しつつも、常に若々しい生命に憧れを抱き続ける主人公信吾のあり方、それは又、美への強い執着と、醜への激しい嫌悪感でもあった。自然や芸術品の鑑賞においてばかりでなく、対人関係においても容赦なく信吾の心理を左右してしまうその美意識のあり方は、保子の姉に対する永遠の憧れと、菊子のどんな細かい表情、身振りでも直ぐに気の付く思いやりのある態度と、一方、保子のいびきや房子のだらしないさ、そして里子の意地悪い目付きを直ぐに咎めなくなる、厳しく、潔癖な、容赦ない態度との対比によつても見事に表現されていた。そして更に考えてみると、そのような美意識は、美に対する憧れそのものの中にも又、二元的な要素を含んでいるのではなからうか。

『伊豆の踊子』以来の、乙女の初々しさ、清純さへの憧れと、『千羽鶴』の太田夫人等に代表される「人間以前の女、あるひは人間の最後の女」「女の最高の名品」に対する限らない憧れとは、川端の中に純粹の美と、生命の美とを同時に求める心が存在する事を語っている。もみちの彼方にある初恋の人への憧れと、夢の中で官能だけの女を求めている信吾の気持がそれである。それは、少しでも緊張が弛めば直ぐにでも醜悪なものに転じる危険性を含みながら、「愛もよろこびも」「みだらな夢のみだらな思ひさ

へ」なかつた「味気ない寢覚め」が、それを辛くも救っている。ここに於いて、川端の美意識が如何に虚無感と深く結びついているかについては、わざわざ指摘するまでもない事と思う。そしてその虚無感も又、フロイドの精神分析学に基く現代的認識によるものと、仏教に見られるような大らかな肯定を含んだ自己否定という伝統的なものとの二つの要素を含んでいると考えられるのである。

「あつ。」と信吾は稲妻に打たれた。

夢の娘は菊子の化身ではなかつたのか。夢にもさすがに道徳が働いて、菊子の代りに修一の友だちの妹の姿を借りたのではないか。しかも、その不倫をかくすために、苛責をごまかすために、身代りの妹を、その娘以下の味気ない女に変へたのではないか。

もし、信吾の欲望がほしのままにゆるされ、信吾の人生が思ひのままに造り直せるものなら、信吾は処女の菊子を、つまり修一と結婚する前の菊子を、愛したいのではあるまいか。

その心底が抑へられ、ゆがめられて、夢にみすばらしく現はれた。信吾は夢でもそれを自分にかくし、自分をいつはろうとしたのか。

(「傷の後」)

ここに見られる信吾の心理分析は、夢によつて自己の無意識の

エゴの醜悪さ、狡猾さをあばいている点で明らかに前者であり、川端の生いたちに見られる孤児の孤独は本質的には後者と結びついていたと思われ、それは、例えば「……日本でも昔は極楽詣りの空想と一緒に、愛らしい信仰が生きてゐたことがあつた。前世の王姫は現世の乞食であり来世の紅雀であり、その次の世の谷間の白百合である。現世の詩人は来世の仏であり、前世の白鼠であつたと言つた風のものだ。かうした輪廻転生の説を、君はどう思ふ。……」以下、既に『空に動く灯』の中で滔々と展開された輪廻転生説を見てもわかるように、川端の初期の作品より一貫して見られる汎神論的世界観によつても裏付けられるのである。

ところでこのような伝統的自然観、生命観は、『山の音』においても自然と人事の融合といった形でしばしば見出されたが、それは単に自然没入といった面だけでなく、生命そのものの神秘感、不気味さといった方向にまで発展している事にも注意しなければならぬ。仏教で言う生霊、死霊、物の気といった類であろうか。その傾向は、『山の音』ならずとも、『慰霊歌』ならずとも、例えば初期の『十四才の日記』、中期の『子供一人』、近年の『女であること』等にも一貫して見られる事に気付く。

「（食事のよく行けて、通じのないのは腹の中の毛物（獣）が食うてますのや。）と言うてやりました。（中略）」

しかしもう私の頭には、「毛物が食べてゐるのだ。」といふ言葉が刻みつけられて離れぬ。（『十四才の日記』）

芳子を幾つもの人間に変へて、魔術師のやうに翻弄したとも思へる、新しい生きものは、あどけない猿みたいな恰好で、一度は死の淵に臨ませ、一度は狂気の近くに追ひつめた母の乳を強い力で吸つてゐた。（『子供一人』）

「さかえちゃんわたしを慕つて来て、わたしに子供を持つて来てくれたのかもしれないわ。」（中略）

市子は夫にも、あからさまには言へないが、考へやうによつては、さかえが市子に、ふしぎな生命を持つて来たのは、争へないことのやうだつた。（『女であること』）

そしてこのような生命観は構成の上でも、血のつながりを主軸とした人物設定といった面に顕著に表われてきているのである。母から娘へ流れる生命、姉と妹の生命の流れ、異母姉妹間の愛と憎しみ、父から娘へ流れる生命の神秘といったテーマを扱った作品の多いことから、如何に作者が生命の流れに重きを置いているかは明らかであろう。母から娘へ流れる生命の讃歌の中で、完全に生命の象徴にまで美化され、神秘化されている『父母』の少女等はその典型と言えよう。

さてこのように考えてみると、川端文学のテーマは常に何らか

の形で生命への憧れと言った面を持つている事がわかるのであるが、その生命の性格はと言うと、かなり複雑な様相を呈していて、なかなか一言で説明できるものではない。代表作だけを並べてみても、『伊豆の踊子』に表現された潑刺とした生命の輝き、『雪国』や『千羽鶴』の母性的な生命の美しさ、『温泉宿』の野性的な生命のたくましさ、『禽獣』でみつめている無意識のエゴとしての生命の醜悪さ、そして『抒情歌』等に代表される仏教的な輪廻としての生命の神秘性と不気味さ等々、そこには様々な要素が渦巻いている事がわかる。しかしこのように複雑な様相も、結局は二元的なものが互いに反撥し、交錯し合う姿に外ならないのではなからうか。本論で考察した『山の音』の生命観はこれらの集大成として、その二性を十分に証明していたと思えるのである。そしてそれは描写の上でも、感覚性と知的観念性との融合といった面でその二性を明らかにしている。例えば『雪国』や、『千羽鶴』のように、感覚だけで成り立っているような世界が読者に左程生まましきを感じさせず、駒子の清潔さ、葉子の冷たい美しさといったようなものが、現実捨象、美化、抽象化、象徴化というようなあらゆる観念的な工夫によつて、純粹の感覚にまで高められている事からもわかるように、川端文学に於ける感覚の世界は、鋭い知的観念によつて描き出されているのである。そ

してこのように二元的な要素が微妙に入り組み、調和を保つ文学であればこそ、対比性、反覆、象徴性、及び細部の緻密さといった特徴的な構成のあり方が必要とされたのではなからうか。事件も、人間同士の争いも、心の葛藤も、人格的な恋愛もなく、ただ美と生命のみを求める文学、それは無論散文ではあるけれども、本質的には非常に詩に近いものであることがわかる。川端の、一字一句を決して疎かにしない態度、厳しい現実捨象によつて不思議な調和を保つ美の世界、そこに見られる芸術性は、飽くまでも純粹の美を追求しようとする詩人の態度から生まれたものに外ならない。即ち、繊細な感受性と鋭い知性という二元的な素質が一つに溶け合つた時、孤高の文学と言われる川端独自の、個性ある、完成された作品が生み出されたのだと考えられるのである。

(昭四〇 日文卒 本学日本文学研究室助手)